

羽田沖浅場でマダイとトラフグの稚魚を採捕

羽田沖でマダイとトラフグの稚魚が続けて採捕されました。マダイは令和 6 年 7 月、羽田 C ラン沖で刺網操業していた港漁協所属の辰宝丸（船長：鈴木忠之氏）により、トラフグは令和 6 年 8 月に同じく羽田沖 C ラン沖で延縄操業していた大田漁協所属の第 3 えさ政丸（船長：村石幸光氏）とトビウオ丸（船長：小川雄二氏）により採捕されました。

採捕されたマダイは尾叉長 8.5cm、体重 13.5 g と尾叉長 8.3cm、体重 13.3 g の 2 尾でした（写真 1）。2 尾とも鼻孔隔皮の欠損や胸鰭等の湾曲がないことから、天然魚であると思われます。辰宝丸さんによれば、2 年ほど前から刺網に掛かるようになってきたとのこと。マダイは稚魚期に浅場に生息し、成長に伴い深場に移動していくことが知られています。当協会では羽田沖で藻場造成試験を行っており、トピックス NO.75 号でお知らせしたとおり、平成 3 年からは移植したアマモが生残する状況が続いています。羽田沖浅場のアマモ藻場の規模はまだ小さいものの、この藻場が稚魚などの隠れ家となる機能を果たしている可能性があります。



写真 1 マダイ (*Pagrus major*)



写真 2 トラフグ (*Takifugu rubripes*)

また、同じく羽田沖で採捕されたトラフグの体長は約 10cm で、同じサイズのクサフグに混ざって漁獲されていたため、一見すると分かりにくかったものの、体表にある特徴的な黒斑から判別することができました（写真 2）。

平成 21 年度から当協会が行っている羽田沖の延縄調査では、令和元年に 2 尾、令和 2 年に 3 尾のトラフグ稚魚が採捕されています。トラフグは北から南まで広く生息していますが、東京湾でもトラフグの漁獲量が増加しており、産卵も確認されています。

両魚種とも稚魚期は浅場に生息し小魚や小動物を食べていますが、羽田沖浅場もさらに多くの幼稚魚が育つ環境にしたいものです。